

黒岩知事「心外」発言の波紋

障害者殺傷事件の現場となった入所施設「津久井やまゆり園」の全面建て替え方針に相次いだ異議に対する、黒岩祐治知事の「非常に心外」との発言は、公聴会の開催意義自体を否定しかねない問題をほらむ。公聴会では一体何が問題とされたのか。主な発言を紹介する。

(成田 洋樹)

大型施設は時代錯誤

(県社会福祉審議会委員で国際医療福祉大学大学院教授の大熊由紀子さん)

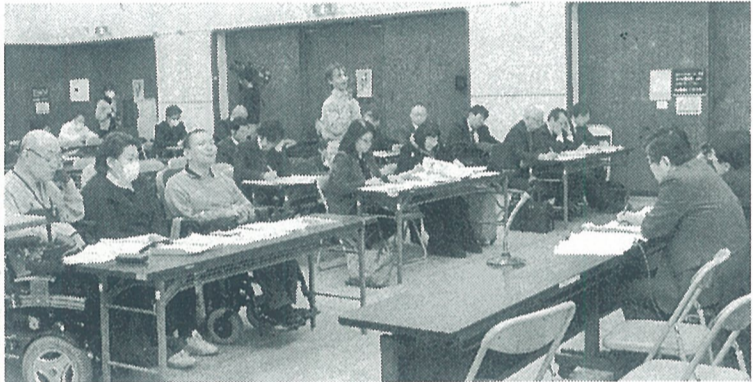
大型施設は時代錯誤。建設費が60億円から80億円というが、1億円あればいいグループホームができる。80億円なら80カ所できる。定員5人として400人が支援を受けられる。今より手厚い人員配置にすることもできる。

今回の事件は通り魔ではなく(元)職員がやったことで、いくら防犯装置をつけても防げない。障害者の意向を大切に、地域と交わりながら支援している施設職員は、殺すなんて一瞬たりとも思い浮かばないという。なぜ容疑者がそういう考え方に陥ったか。人里離れたところに大きな施設を造ったり、夜勤は安いバイトに頼んだりするなど施設の体制にこそ事件の根がある。そこを考えずに鍵

時代の正体

障害者殺傷事件考

目を二一と時代



公聴会で発言する出席者ら
11日、横浜市神奈川区のかわがわ市民センター

50年先見据え議論を

(県社会福祉審議会委員で明治学院大学教授の茨木尚子さん)

重度身体障害者が地域で暮らすことを実現する運動に1980年代から関わってきた。障害者の自立生活のため、50年先を見据えてより根本的な議論をして再建計画を立ててほしい。今回の計画は家族の希望を基にしたというが、本人の希望確認も欠かせない。数年前に県の入所施設で職員のストレス調査をしたところ、経験の浅い若い職員のストレスが高かった。1人で複数の行動障害のある入所者を見なければならぬからだ。すぐに専門職として仕事をしなければならぬことも負担になっている実態がある。職員がス

当事者の声を聞いて

(県頸髄損傷者連絡会の磯部浩司さん)

健康者が事件現場に家を建て替えて住むかと聞かれたら多分住まないと思う。それが障害者の場合、疑問も持たれずに施設が造られてしまふのはおかしい。当事者の声を聞いてほしい。親の思う幸せと当事者の幸せは違う。建て替えるは拙速。重度障害者は言葉でやりとりできない方が多い。時間をかけて聞き取らないと本当のニーズは出てこない。建て替えた施設を事件に屈しないシンボルにするを強調しているが、そのために建て替えるというのは納得いかない。

地域生活移行こそ柱

(NPO法人県精神障害者地域生活支援団体連合会の戸高洋充さん)

やまゆり園は1964年に造られた施設。当時と今求められているものは基本的に違う。地域移行と言われるが、入所施設からの地域移行を進めたいのが現状。地域移行を進めるためにどんな施設であるべきかをまず考えるべきだ。

本人の意思尊重して

(県手をつなぐ育成会会長の依田雅子さん)

福祉理念の変化や地域福祉サー

ビスの充実、人口減少を考えれば、大規模収容型の再建は適切ではない。形だけ小さくしてグループホーム型にすればいいということでもなく、人権に配慮した職員体制が必要だ。

家族の意向イコール本人の意向とは限らない。本人の意思がどうなのか、本当にあの場所に戻りたいのか。選択肢がなければ、答えられない。地域との交流は、たまに触れ合うのでは意味がない。外から来てもらう交流ではなく、施設から社会に出て行くという機会がなければいけない。形だけの交流で終わらないようにしてほしい。

地域での生活が基本

(県障害者施策審議会委員でNPO法人県視覚障害者福祉協合理事長の鈴木孝幸さん)

障害者福祉についての考えを取りまとめた上で再生計画を立てるべき。建て替えるありきではなく、障害者への理解をどう深めるかが重要なポイントだ。これからは地域で生活するのが基本であり、地域どう共生していくかを考えるのが大切。8〜10人規模のグループホームを数多く造っても建て替える費用ほど予算はかからない。多くの小規模施設を整備して、地域に開かれた施設にするべきだ。職員の処遇改善も必要だ。

希望かなえる支援を

(障害のある人と援助者をつくる日本グループホーム学会事務局長の室津滋樹さん)

大切なのは入所者本人の意向を聞き取り、希望がかなうようにするために何をすればいいのか、だ。長く入所している方がいると思うが、施設以外での生活の経験が少なくない人たちがとって、どういう生

差別許さぬ声明出せ

(神奈川・「障害児」の高校入学を実現する会の柳沢恵美子さん)

重い障害があっても小中高校、そして将来も一緒にみんな生きていこうと、特に壁の高い高校入学の運動を30年近く行ってきた。多数の重度障害者が標的にされた事件だったが、なぜ重度障害者が生まれ育った地域から離れ、大規模施設で暮らさなければならなかったのか。なぜ障害者はあつてはならない存在と言われ、殺されなければならなかったのか。重大な障害者差別事件だと思ふ。その認識が基本構想では非常に希薄だと感じる。知事と県議会が障害者に対するヘイトクライム(憎悪犯罪)を断固として許さない声明、決議を出すべきだ。

これまでの障害児者教育は分離教育が主流だった。一時的な交流だけだと「気の毒な人たち」「特別な人たち」といった同情や哀れみの対象になり、短絡的に「あつてはならない存在」という見方につながる危険性がある。障害があつてもなくても同じ教室で学習する教育を進めることで、互いを尊重する関係が生まれると思ふ。大規模施設の再建は時代の逆行以外何ものでもない。こうしたヒアリングを繰り返し、実のある構想をつくってほしい。

書籍化のお知らせ

「時代の正体」シリーズの書籍化第3弾「ヘイトデモをとめた街—川崎・桜本の人びと」が刊行されました。ヘイトデモに対する闘いからヘイトスピーチ解消法成立

への歩みをたどりながら、「共生のまち」に暮らす住民の思いをつづり、差別の実相を問う。現代思潮新社から1600円(税別)で全国の書店で販売中。



あの頃の日本人に、笑顔で負けるな。
見る夢の大きさを負けるな。